

澱粉粕の養豚飼料としての価値試験 (第1, 2報)

細山田文男*・児玉重方*

HOSOYAMADA, H. and KODAMA, S. On the Feeding Value of Starch Feeds as a Hog Feed (1, 2)

1. 澱粉粕の配合割合について

養豚飼料として澱粉粕を使用する場合、飼料中ほどの程度配合してよいか、すなわち、適正な配合割合を知る為に、澱粉粕を60%配合した場合と、40%配合した場合について飼養試験を行った。

試験方法 ヨークシャー種6頭(♀3, ♂3), パークシャー種6頭(♀1, ♂5)共に生後90日の仔豚で、試験期間は90日間、給与量は体重の3.8%とし、飼料の配合は第1表の通り行った。

第1表 飼料の配合割合(風乾比) %

区 分	澱粉粕	米 糠	藪	麦 糠	大豆粕	魚 粉	コロイ カル	食 塩	D.C.P
60% 配合区	60	14	—	—	16	10	1	0.5	12.0
40% 配合区	40	24	8	7	16	5	1	0.5	12.2

試験成績 飼養成績は第2表の通りである。

即ち給与飼料はD.C.P及びT.D.Nがほぼ同一になるように配合して給与したのであるが、60%配合区は、40%配合区に比し、ヨークシャー種で75.5%、パークシャー種で92.1、平均して86.6%しか發育しなかつた。

1kg増体当の給与飼料は60%配合区がいつでも多く、又飼料費も高くつた。飼料の利用率は40%配合区が良かった。

即ち、仔豚の飼料に澱粉粕を60%配合することは栄養価を考慮しても發育に悪影響が表われるので、飼料の経済的利用から云つても、40%配合した方が有利と思われる。

*宮崎県農業試験場

第2表 飼 養 成 績

区 分	試 験 開 始 時 体 重	試 験 期 間		1 kg 増 体 当 り			
		増 体 重	指 数	給 與 飼 料	飼 料 費	T.D.N	
ヨ ー ク	60% 区	18.20	27.06	75.5	3,609	90.74	2,501
	40% 区	18.00	35.84	100	3,116	81.13	2,155
パ ー ク	60% 区	15.34	21.39	92.1	3,755	94.37	2,592
	40% 区	15.32	23.22	100	3,488	90.84	2,413
平 均	60% 区	16.77	24.23	86.6	3,673	92.36	2,546
	40% 区	16.68	27.98	100	3,443	84.95	2,256

2. 澱粉粕の煮熟の効果について

澱粉粕を夏に使用する場合に、煮熟する必要があるかどうかを知る為、乾燥粕を煮熟した場合、1昼夜水に浸してそのまま使用した場合、生のまま貯蔵して給与した場合について、発育及び肉質を比較調査した。

試験方法 ヨークシャー種♂6頭、パークシャー種♂2、♀2頭の計10頭を供試した。共に生後120日の仔豚で、試験期間は150日間、給与量は体重の4.5～3.0%とし、飼料は第3表の通り配合した。

第3表 飼 料 の 配 合 割 合 (風 乾 比) %

区 分	澱粉粕	米 糠	穀	大豆粕	魚 粉	コ ロ イ カ ル	食 塩	D.C.P
第1期(50日)	50	18	6	16	10	1.5	0.5	13.3
第2期(50日)	55	18	3	14	10	1.5	0.5	12.2
第3期(50日)	60	18	—	12	10	1.5	0.5	11.1

試験成績 飼養成績は第4表の通りである。

第4表 飼 養 成 績

区 分	試 験 開 始 時 体 重	試 験 期 間		1 kg 増 体 当 り			
		増 体 重	指 数	給 與 飼 料	経 費	T.D.N	
ヨ ー ク	煮熟区	35.25	60.25	100	5,606	165.90	3,845
	水浸区	36.05	61.65	102.3	5,649	147.77	3,874
	生区	35.90	61.85	102.7	5,719	149.65	3,923
パ ー ク	煮熟区	32.85	64.30	100	5,138	153.24	3,555
	水浸区	33.65	64.35	100.1	5,202	136.05	3,568
平 均	煮熟区	34.05	62.28	100	5,395	159.35	3,700
	水浸区	34.85	63.00	101.2	5,426	141.91	3,721

備考：経費とは、飼料費に燃料費及び煮熟に要した時間のみを計算して労務費として加えたもので、水浸区、生区は飼料費だけである。

試験期間の増体量は、煮熟区、水浸区、生区の間で殆んど差はみられなかつた。しかしヨークシャー種とパークシャー種の間を比較すると、パークシャー種の方が発育が早い傾向を示した。1kg増体当りの給与飼料は生区が僅かに多く、次いで水浸区であるが飼料の利用性は煮熟区の方が僅かに良かつた。しかし経費

は煮熟区が最も高くつた。

屠肉成績は第5表の通りである。即ち、各試験区間に大差がみられず、殆んど同じであるが、ヨークシャー種では水浸区に内臓量が大きく脂肪層厚く、脂肪肉がやや多くみられ、煮熟区に脂肪が最も少なかつた。パークシャー種の水浸区にもやや脂肪層が厚くみられた。しか

第5表 屠肉成績

区 分	絶食体重 kg	内臓量 kg	屠肉率 %	精肉 割合 %	枝肉中%			腎臓 脂肪 kg	皮下脂肪の厚さ cm				
					赤肉	脂肪	骨		肩	背	腰	平均	
ヨーク	煮熟区	85.15	10.70	72.0	60.0	56	32	12	1.70	4.9	3.5	3.7	4.0
	水浸区	88.85	12.30	71.1	59.5	53	35	12	1.80	6.0	3.5	3.8	4.4
	生区	86.40	10.85	73.1	61.0	55	34	11	1.80	5.0	3.4	4.0	4.1
バーク	煮熟区	98.10	11.75	73.9	63.8	62	28	10	2.23	4.7	3.1	3.1	3.9
	水浸区	97.30	11.25	74.0	62.6	61	28	11	2.27	4.8	3.2	4.2	4.1

備考：24時間絶食後剥皮による，供試豚全部について調査した。

バークはヨークより20日遅く屠殺した。

し，バークシャー種はヨークシャー種より20日遅く屠殺したけれども，脂肪の割合少なく，赤肉が多かつた。

即ち，澱粉粕は，煮熟，水浸，生のいづれにて給与しても，発育及び肉質に殆んど差が認められず，煮熟す

ることは経済的に燃料費等がかさみ，不利であつた。すなわち他の配合する飼料を適正に行えば，澱粉粕は生のままか，乾燥粕は1昼夜水に浸して給与するのが望ましいと思われる。